



大久保小だより



平成29年11月1日第8号

さいたま市立大久保小学校

さいたま市桜区五関21

048(854)7636

男子155名女子123名計278名

学校教育目標 **かいっぱい** **かしこく** **やさしく** **たくましく**
～ふるさとを愛し、志高く生きる、心優しい大久保の子ども～

～ 本の中には、感動がいっぱいだ ～

校長 相川 光彦

すっかり秋めいてきました。校庭の木々も少しずつ色づいてきています。寒暖差が大きく朝は、肌寒さを感じる季節です。しかし、子どもたちは、元気いっぱい半袖シャツの子どもいます。体調管理には、十分注意をしたいものです。

サタデースポレクは、大久保小・大久保東小・神田小の3校が一堂に会して交流できる場であり、本当に素晴らしいことです。また、11月3日には、大盛り上がりの大久保地区の運動会があります。地域の方、各学校のPTAの方に感謝します。

11月は、大久保小学校の読書月間です。読書が子どもたちの成長に有効であることは、皆さんご存じのとおりです。子どもが、本好きになるきっかけの一つに「夜寝る前の読み聞かせ」や「昔話などの語り」があると思います。子どもたちは、話を聞くことで、想像力を働かせ物語の世界に入り込んでいくことができます。その経験が、自分で本を読み色々な世界を自分の中につくり上げていくようになるのです。読み聞かせなどは、低学年だけのものではありません。子どもの頃の話でも興味をもちますので、ぜひ、夜寝る前にお話を聞かせてみてはいかがでしょうか。

“ミヒヤエル・エンデ”というドイツの児童文学者の書いた本に『はてしない物語』（ネバーエンディングストーリー）があります。主人公の“バスチアン”が、クラスのいじめっ子から逃げて入り込んだ古本屋。おやじさんが読んでいた「はてしない物語」の本と出会い、学校の物置部屋で、本を見つめてつぶやく

「本って、閉じている時、中で何が起きているのかな。そりゃ、紙の上に文字が印刷してあるだけだけど・・・きっと何かそこで起きているはずだ。だって開いたとたん、1つの話がすっかりそこにあるのだもの。ぼくのまだ知らない人々がそこにいる。ありとあらゆる冒険や活躍や闘いがそこにある（中略）読まなくちゃそういうことを一緒にやれないんだけど、それがみんな最初から中に入っているんだ。」

私も、15少年漂流記や海底2万マイルなどの本を読んだとき、その物語の中で一緒に冒険しているように感じていました。本の持っている魅力ですね。多くの子どもたちにその魅力を分かってほしいというのが、読書月間のねらいです。

1冊の本の中には、生き方や考え方、冒険や活躍など人が望むことがいっぱい詰まっているのです。TVゲームやスマホゲームだけで目を使うのではなく、多くの人に本を読むことで目を使ってほしいと考えています。

図書室には、昭和の本も平成の本もあります。とってもいいお話なのに子どもたちは、あまり昔の本を読みません。文体が古かったり、生活環境が今と違ったりするからだと思います。でも、いつの時代でも読ませたいものが名作です。子どもの頃に読んだ本をぜひ、お勧めしてください。子どもたちも喜ぶと思います。

これからは、運動や学習にとってもいい季節です。これからも、「明日も学校に行きたい」と思える大久保小のために私たち教職員も保護者と力を合わせて、『やればできる』を合言葉に子どもたちのよさを引き出し、「ほめて伸ばす教育」を推進して参ります。よろしくお願ひします。